

# 歯科技工材料を再考する

(基礎には基礎の大切さがある)

北海道歯科技術専門学校副校長  
日本歯科技工士会認定講師  
日本歯科技工学会認定士  
岩崎 佳治

講演に先立ち、我々が生きている今の日本の現状を簡単に説明したいと思う。日本や北海道の人口推移動向や少子高齢化、国の借金状況、そして、これから予想される歯科医療の方向を考察したいと思う。

我々歯科技工士は、数多くの材料を駆使して人工臓器たらん歯科補綴装置を日々製作している。たとえば、石膏、ワックス、レジン、陶材、埋没材、印象材、貴金属材料、非貴金属材料、それに多種多様な機材や器材など、我々が日々使用する品目を合計したら簡単に100種類を越えてしまうだろう。

これら多くの材料や機材は、それぞれメーカーが調査研究した使用方法や操作方法がマニュアルとして公表されている。我々は基本的にその方法に従って、材料や機材を扱うこととされている。しかし、多忙な毎日の歯科技工業務の中で、自己流に材料や機材を取り扱ってはいないだろうか？「天性の勘」とかいながら、適当に計量したり、しなかったり、いい加減な操作をしていないだろうか？歯科材料を研究開発する段階で、「誰がやってもそれなりの物ができるように研究しているのだよ」とお教えいただいたのは、元東京医科歯科大学名誉教授、北海道医療大学歯学部長で在られた故神澤康夫先生のお言葉である。我々はその研究者やメーカーに甘えていることはないだろうか？

この講演では、現在、歯科技工士養成校で使用している教本「歯科理工学」(全国歯科技工士教育協議会編纂)から印象材、石膏、ワックスの内容を本校の理工学実習データをもとに解説し、歯科材料の基本的な取り扱い方法を再認識し、改めて基礎の大切さを再考して頂きたいと思っている。

後半は、私が北大大学院歯学研究科時代に研究テーマとして取り組んだ「歯科技工におけるレーザー溶接の活用」について、基礎知識と臨床応用例を中心に説明したいと考えている。

年頭にあたり「基礎には基礎の大切さがある」を再考してほしい。